



- 調査結果を受けて、専門医からのコメント

**調査監修医：近畿大学医学部 皮膚科学教室 講師・医学博士 柳原茂人先生**

アトピー性皮膚炎の患者さんは直接的な湿疹やかゆみの症状だけでなく、それに付随する日常生活の制限や心理的・精神的な負担などの「疾病負荷」を抱えています。しかしながらアトピー性皮膚炎の患者さんでも、疾病負荷について知らない、あるいは理解していない方が多いというのが現状です。

私自身、アトピー性皮膚炎の患者です。「疾病負荷」という概念は知っていましたが自分はそれと無縁だと思っていました。ところが、適切な治療を受け症状が改善したことで、今まで「疾病負荷」があったことに気が付いたのです。長年、アトピー性皮膚炎とともに生きてきたことで「疾病負荷」を伴う生活に慣れすぎてしまい、「疾病負荷」のある状況が日常化していたのだと気が付きました。

疾病負荷の負担を軽減するには、患者さん自身はもちろん、ご家族や周囲の方々にも「疾病負荷」について理解していただくことが重要だと考えています。

アトピー性皮膚炎の治療には家族と十分なコミュニケーションを取ることが不可欠です。かゆみのみならず精神的な苦痛を抱えながら治療を長期的に続けなくてはならないので、治療を諦めてしまいがちです。そんなときは家族のサポートが支えになります。私も家族の声をきっかけに治療に積極的に取り組むようになり、前述したように適切な治療によって「疾病負荷」から解放されました。

今回の調査でも、家族とコミュニケーションが取れている患者さんほど、治療に積極的に取り組んでいる、現在のアトピー性皮膚炎の状態に満足しているという結果がでています。

また、医師は患者さんの声で治療を選択します。「もっとよくなりたい」と思う患者さんは治療を諦めずに、その声を医師に届けてください。患者さんの声を我々、医師も待っています。

**奈良県立医科大学医学部 皮膚科 教授 浅田秀夫先生**

今回の調査でとくに注目したいのは、家族内で、アトピー性皮膚炎についてのコミュニケーションが取れているかどうかを調べた結果です。

調査結果を見ますと、アトピー性皮膚炎患者本人への調査では、「コミュニケーションが全く取れていないと思う」と回答した患者の比率が、中等症群と比べ重症群では顕著に高くなっています (Q3-1 参照)。一方、家族への調査では、逆に、「コミュニケーションが非常に取れていると思う」と回答した人の比率が、中等症群と比べ重症群で大幅に増えていることがわかります (Q3-2 参照)。このことから、患者さんと家族との間で、コミュニケーションに関する認識のずれが生じていることが予測されます。すなわち、重症のアトピー性皮膚炎においては、疾患に関するコミュニケーションが一筋縄ではいかない状況がうかがえます。

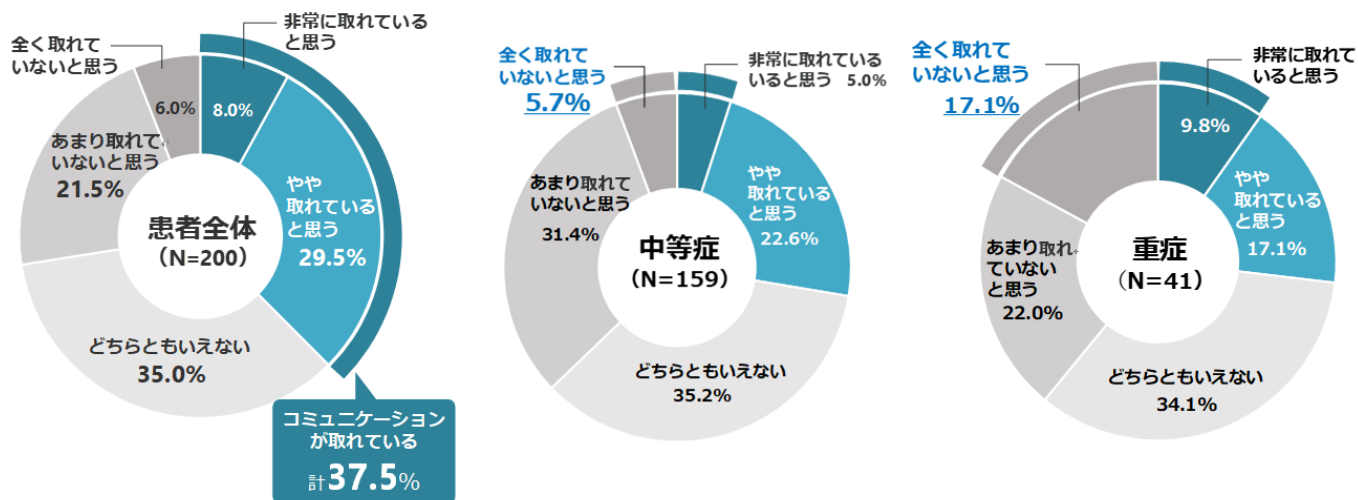
ただし、患者および家族の何れの調査においても、重症群では中等症群に比べて、「コミュニケーションが全く取れていないと思う」、「コミュニケーションが非常に取れていると思う」の強い否定ならびに強い肯定の回答比率が高く、コミュニケーションに関する認識が両極に偏っていることがわかります。これらの結果から患者さんも家族も重症群のほうがコミュニケーションに対し曖昧に考えず、より高い意識を持ち、コミュニケーションの必要性を感じていることがうかがえます。

アトピー性皮膚炎は、罹病歴が長いことが特徴のひとつであり、また自覚症状のみならず目に見える疾患ですので、身体的、精神的ストレスが大きく、家族とのコミュニケーションによる支えが、症状の改善に重要な役割を果たしています。今回の調査結果からは、重症度の高い患者さんやそのご家族が、認識のずれはあるにしても、コミュニケーションを重要視している姿勢がうかがえました。この事実は、コミュニケーションを取ることをあきらめて、無

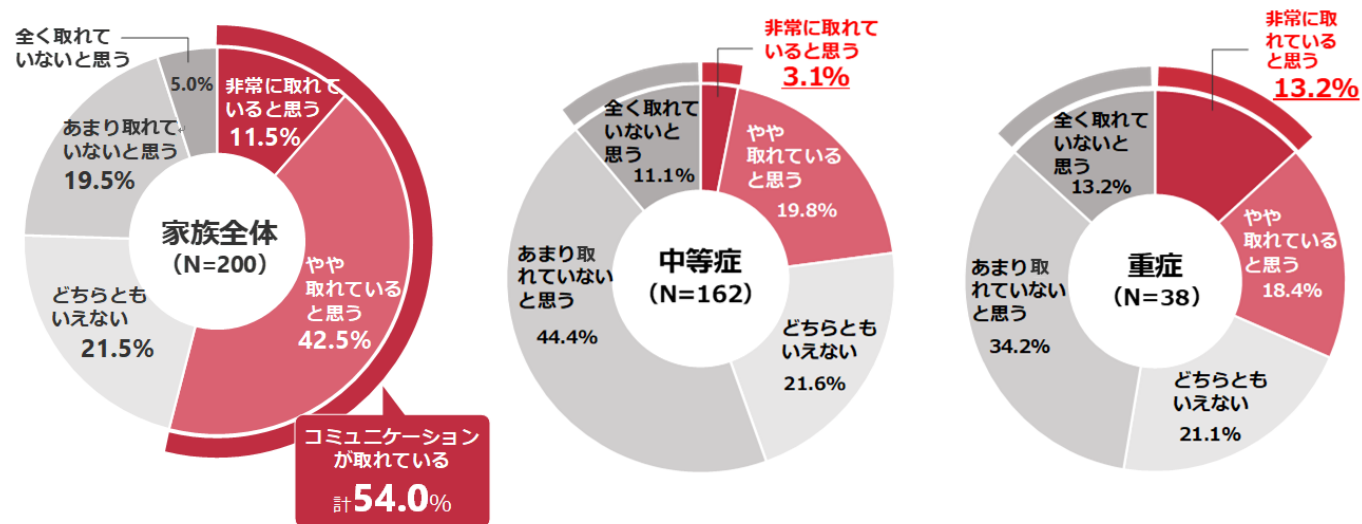


関心な状態であるよりも、治療や症状の改善に向けてプラスに働くことが期待できる好ましい調査結果と言えるのではないのでしょうか。

**Q3-1. あなたはご自身のアトピー性皮膚炎の症状について、ご家族と十分にコミュニケーションが取れていると思われますか。**



**Q3-2. あなたの家族のアトピー性皮膚炎の症状や不安について、本人と十分にコミュニケーションが取れていると思われますか。**





近畿大学医学部奈良病院 皮膚科 教授/アンチエイジングセンター 副センター長 山田秀和先生

アトピー性皮膚炎の治療においては、薬物治療だけでなく環境整備も重要な要素のひとつです。

食生活に気をつけることや洗濯、入浴、ベッドの掃除など日頃から清潔な状態を保ち、アトピー性皮膚炎の悪化因子を取り除くことはとても重要です。しかしすべてを患者さん 1 人で管理するのは大変ですし、小さなお子さんであればなおさらです。同居家族とのコミュニケーションは、環境整備の管理・分担にも繋がるため、結果としてアトピー性皮膚炎の状態にも良い影響があるのだと思います。

コミュニケーションと言っても両者の関係性によってはギャップが生じる場合もあり、今回の調査でも結果として表れています。だからといってコミュニケーションを諦めるのではなく、両者が互いにそのギャップを認識しながら接することが最も大切なことだと思います。

アトピー性皮膚炎はよくなったり、悪くなったりを繰り返す疾病です。受験、就職、転勤などのタイミングで悪化してしまうことも珍しくありません。

そのような重要なライフイベントの時こそ、夫婦のコミュニケーション、親子のコミュニケーション、そして医師と患者さんのコミュニケーションを図りながら、前向きにそして積極的に治療に望むことが重要です。